

日曜聖書講筵（婦選会館 公開集会）

レプタ二枚

――マルコ伝第12章35～44節――

1965年5月1日

小池辰雄

水を割らない 新島襄と二ドル 行動的全身的神有 キリストの中に飛び込む 無私の神的な姿

【マルコ12・35～44】

35 イエス宮にて教うるとき、答えて言い給う『なにゆえ學者らはキリストをダビデの子と言うか。36 ダビデ聖霊に感じて自らいえり「主わが主に言い給う、我なんじの敵を汝の足の下に置くまでは、我が右に坐せよ」と。37 ダビデ自ら彼を主と言う、されば争でその子ならんや』

大なる群衆は喜びてイエスに聴きたり。38 イエスその教のうちにいたもう『學者らに心せよ、彼らは長き衣を着て歩むこと、市場にての敬礼、39 会堂の上座、饗宴の上席を好み、40 また寡婦らの家を呑み、外見をつくりて長き祈りをなす。その受くる審判は更に厳しからん』

41 イエス賽銭函さいせんぼこに対して坐し、群衆の錢ぜにを賽銭函に投げ入るるを見給う。富める多くの者は、多く投げ入れしが、42 一人の貧しき寡婦やもめきたりて、レプタ二つを投げ入れたり、即ち五厘りんほどなり。43 イエス弟子たちを呼び寄せて言い給う『まことに汝らに告ぐ、この貧しき寡婦は、賽銭函に投げ入るる凡ての人よりも多く投げ入れり。44 凡ての者は、その豊かなる内よりなげ入れ、この寡婦は其の乏しき中より、凡ての所有、即ち己が生命の料しろうをことごとく投げ入れたればなり』

●水を割らない

35 イエス宮にて教うるとき、答えて言い給う『なにゆえ學者らはキリストをダビデの子と言うか。36 ダビデ聖霊に感じて自らいえり「主わが主に言い給う、我なんじの敵を汝の足の下に置くまでは、我が右に坐せよ」と。37 ダビデ自ら彼を主と言う、

即ち、「アドナイ」と言つた。



されば争^いでその子ならんや』

マタイ伝の一番先を見ると、

「アブラハムの子、ダビデの子」

と書いてある。けれども、ここでは、イエスは自分を

「ダビデの子」

とはおっしゃらない。ダビデは自分のことを「主」と言っている。そして、神さまが

「私の右に坐せよ」

と。復活・昇天のキリストのことを既にイエスは預言をもつてはつきりとそういうように言つてらっしゃるわけです。アブラハムの裔^{すえ}でありながら、しかし、イエスは

「アブラハムの先にありし者」

である。いくらアブラハムの信仰が立派であるといつても、キリストの信はまたそれとは次元がちがう。ダビデがいくら地上の王として理想に近いような王者であつても、キリストが王者であるということは、「メシヤ」であるということは、全然その意味がちがう。こういう非常に確然たる自覚をもつてキリストはこの時に宣言しておられる。

大なる群衆は喜びてイエスに聴きたり。³⁸ イエスその教のうちにいたも

う『学者らに心せよ、彼らは長き衣^きを着て歩むこと、市場にての敬礼、³⁹ 会

堂の上座、饗宴^{ふるまい}の上位^{ふりまい}を好み、⁴⁰ また寡婦^{やもめ}らの家を呑み、⁴¹ 外見^{みえ}をつくりて長

き祈りをなす。その受くる審判^{さはん}は更に厳しからん』

キリストは嫌いなものとして、こういった傲然たる傲慢さ偽善さ、これにまざるものはなかったのだ、マタイ伝23章でも、

「偽善なる学者・パリサイ人よ」

と言つて、もの凄く、こんな激しいことをイエスがおっしゃるかと思うくらいに、激しいことを言われた。神の御霊の真理に即しては、キリストは何ものも恐れず、また何のはばかることなしに、はつきりともを言われたわけです。

どの言葉にもキリストの言葉には水が割られていない。それをどう解釈しようが、本当に受けとるものは受けとれというのが、キリストの福音の性格です。それですから、いわゆるこの世のいろんな常識的な判断や、この世の理性や、この世の感情には躓きとなることとがいくらでもある。福音書はその意味において非常な躓きの書でもあります。

それを適当に水を割つて、解釈しているのが普通のキリスト教界の現状である。私たちは聖書を端的に――その「言葉通り」ということは何も言葉に執するという意味ではなくて――その御言の本当の気合に、その根源の内実――単なる「意味」ではない――その内容がどういう現実であるか、それをキャッチしないと、福音はいつまでたつてもその人の本当の実にならないし、本当の力にならない。どうか、皆さんは、都会はとかくそうですが、いわゆる「聖書の研究」というようなことに妙な魅力をお感じにならないように。研究したつ



ていいですよ。けれども、それではこの預言者・使徒たち、ましてやキリストの世界には入れないということを、私ははつきり言います。

ここからちよいちよい去っていく青年諸君があるのは、みなやはりそういった文化的な角度からの判断で福音書に躓く。私の話に躓くわけです。躓く人は仕方がない。お釈迦さんもそう言ってます、

「どうにもならん」

と。いくら説明したって、どうにもならん。どうか、皆さんが、聖書というものにまず信賴してかからなくてはいいかん。そして、この地上のいかなる科学も芸術も文学も哲学も与えることのできないものを、この聖書が与えているんだということに本当に気がつかなくてはいいかん。

だから、

「学者らに心せよ」

と。この「学者ら」は特に律法学者です。彼らの思い^{たかぶ}昂り、

「自分たちこそ専門家である。自分たちこそ旧約聖書に詳しい」

と。律法に詳しい。また、宗教的におおいにいろいろなことを知っている。祈りも整った祈りをする。見掛け上よさそうだけれども、それはキリストの目で見ると、みんなメッキです。私たちはそのメッキ的なことでないように。コリント前書2章にあるように、パウロは

「十字架の他は何事をも語らず」

と言いながら、パウロがそこで畳みかけて言っていることは御霊のことなんです。そういうことが、今までの無教会は読めていない。こないだ、その前のところの大事な愛のことを語ったときに、私ははつきりとその十字架と聖霊の関係を言っておきました。

●新島襄と二ドル

41 イエス^{さいせんばし}賽銭函^{むか}に対して坐し、群衆^{ぜに}の錢を賽銭函に投げ入るるを見給う。

これは過越^{すぎこし}の祝いのときですから、非常な群衆が四方八方から集まっている。ユダヤの三大節の一つです。イエスも宮に行っておられた。この「賽銭函」は段階があつて――多分、十三だったと思いますが――どれくらい額の上方に入れるということらしい。金持ちはその上方に入れるわけでしょう。群衆のいろんなのが来て、お賽銭を入れる。これは今でも、日本でも――明治神宮や成田山とか、あるいは大阪の方にもあるようですが――元日とか、大晦日とか、いろんなお祭の時に非常に群衆がやってきて、御利益にあずかりたいというわけで、お賽銭をあげるわけです。イエスはそれを見ておられた。

富める多くの者は、多く投げ入れしが、⁴² 一人の貧しき寡婦^{やもめ}きたりて、レプタ二つを投げ入れたり、即ち五厘ほどなり。



昔の五厘です。ドイツの今の貨幣だと34ペニツヒと書いてありましたが、こちらでいうと今の五円玉二つくらいでしょうか。これはとにかくユダヤのお金で最低のお金です。「レプトス」という字は「薄くて小さい」という字です。

⁴³ イエス弟子たちを呼び寄せて言い給う

弟子たちもそこにいたわけですね。

『まことに汝らに告ぐ、この貧しき寡婦は、賽銭函に投げ入るる凡ての人よりも多く投げ入れた。』

こういうことが見える人はやはりキリストの他にいないわけです。

⁴⁴ 凡ての者は、その豊かなる内よりなげ入れ、この寡婦は其の乏しき中より、凡ての所有、即ち己が生命の料をことごとく投げ入れたればなり』

これは譬話でなくて事実です。

これを読んでちよつと思ひ出すのは、新島襄先生がアメリカに行かれて、そしていよいよ帰るときに演説をされた。

「将来の日本の教育にはどうしても宗教教育が大事だということを、アメリカの学校を見て痛烈に思う。そこで、自分は日本に帰って宗教を土台とした大学を建てたいと志を立てた」

と、そういう演説を別れの時にした。聞いている人が非常に感動した。そういう時にすぐ――そういうところがやはりキリスト教国ですね――寄付金を募るわけです、寄付しろなんて言わなくても。寄付を募りまして、新島襄先生に贈ったわけです。その時に、あるお爺さんが二ドルを――ちようどこのレプタ二枚のように――出した。けれども、その人はこの二ドルのお金がないと帰れない。汽車にのれない。汽車賃が二ドルほどかかるわけです。自分は歩いて帰る。それを全部出してしまった。

このことに非常に感激されたことが書いてありました。また、歩いているうちに、今度は後ろから追いかけてくるお婆さんがある。この人もやはり二ドルでしたが。彼らはやはり、こういう「レプタ」のお話をもちろん聞いている方でしょうが、このお婆さんも本当に、このお話を文字通り地でいったわけで、自分の持ち金を、そこに持っていたお金を全部出した。

「自分はもう本当にあなたのその志がうれしいから、全部使ってもらいたい」と。私は、

「日本のプロテスタンティズムと突破の神学基礎論」

という私のドイツ語の論説の中にそれを引用しておきましたが。向こうでもそのお話をした。

寡婦が

「己が生命の糧をことごとく投げ入れた」



という。「生命の糧」という言葉が「ビオス」という「生命」という字なんです。生命をこごとく投げ入れたという。「生命の料」という訳ですけれども、原語ではただ「生命」という字です。生命の料を、生命をそこに投げだした。

二枚あれば大体は、すぐそこに理性が働けば、まあ一枚に、半分にしておこうと考える。「半分なければ、自分もちよつと今日困るから」

と。まず、100人のうち99人はそういうことでしょう。ところが、その寡婦は――多分これはその日暮らしをして、雇われてその日のものを儲けては、貯金もできないような方なんでしょう――二枚持っていて、どつちか一枚をとということでない。一枚持っていたのを、一枚全部出すということはまだ、ある意味においては、なしうるけれども、二枚あって、そのうち一枚残して、一枚を出すというようなやり方が、まず大体の人間の知恵の働きです。ところが、この時に、もはやそういうことでない。これから先がどうなるのこうなるの、ということではなくて、その時に全身をそこに、一つの心をそこに投げ出す。

「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、主なる汝の神を愛すべし」

という。要するに、このキリストの言葉をこの寡婦は文字通り行つた。これが「神を愛する」

ということ。単に心情的に愛しているのではなくて、具体的です。福音の世界は行動的、具体的である。

●行動的全身的

その点で――私は二言目には「無教会」なんてことを言つてすみませんけれども、無教会に育つたものだからね――とかく無教会の信仰は、そういった

「信仰のみの信仰」

とか、

「信仰によつて義とされる」

とか言っているものだから、この行動的、存在的、全身的という角度からは、知らないまにズレをきたしている。観念の世界でいかにも立派なんだけれども、それはダメです。

こないだ、幼年学校の頃の古い友だちにでつくわした。その友だちは、帰りに新宿の神社の中を通つていくと、乞食が幾人かいて、

「自分はその乞食にとにかく持つているものをちよいちやつたら、非常にその乞食と親しくなった」

と言う。また、広島原爆のときにも、

「こうすれば有利であるということよりも、こうした方が正しいということをやつたために、原爆にぶつかつて死ぬべき生命が助かっている」



と言う。その人の述懐を私は聞いて、

「それは君、偶然でも何でも無い。あなたのその実存ゆえに、それは見えざる方がちゃんと守ってくださったんだ」

と言った。いわゆるキリスト教でも何でも無いけれども、神さまは人間というものを本当に見ている。聖書を勉強しているから天国にいくのも何でも無い。

我々は、我々自身が即ち使徒行伝の先を自ら実行していなかったらダメです。私はそういうことを思うたびに、もうこの講壇でしゃべるのが本当に嫌になる。

「私はいつでも、集会なんかやめてしまおうか」

と、そういう意味でも思っています。それは、しゃべることは非常に一つの矛盾です。しかし、私は自分で弁明はしたくないけれども、

「この信行一如の角度を、躓いても転んでも滑つても、とにかくやって行きますので、私は助けられて福音のためには死に到るまで」

と、そう思っております。そのことのためには、一步も退きません。

●神有

この寡婦が、常識を乗り越えて、本当に神に全身を投げだした。ということは、今度は形にとらわれない。それでは、

「持っているものをみんな」

と言つて、何かそういったことが一つの律法になったら、それは今度は、またその行為自身が偽善になる。

要するに、何をしておりまして、また、たとえ皆さんが献金をなさるような時でありまして、それはもちろん何分の一かでよろしい。しかし、何をするにしても、そこに惜しみや常識がなくて、本当に自分はそこにすべての気持をかけて、

「今これだけのものがあるけれども、それはあれどもなきと同じである。私はすべてのことを、自分の私有も全部神有として自覚しているぞ」

と。そして、一番の神有は即ち、この身このまま、この身それ自体が神有である。神のものである。我々の身体そのものが即ち神のものだから、我々の生活そのものが正に献身である。何をしていても、献身である。

よく教会で特に「献身」ということで、式をすることがありますけれども。皆さんは、こういうことをしていच्छやつてもいいですよ。どんな事業をしたつて、どの会社に勤めたつてよろしい。けれども、それ自体が――学校にいがどこにいが――それ自体が献身である。そして、いざという時には、この「レプタ二枚」のごとき行動がとれる信仰をもって、対していなくてはいかん。

相対的な世界に絶して、いつも絶対次元の神の国に自分を投入するときに、神さまは必



ず力を与える。必ず本当の知恵をくださる。どうか、そういう意味において、私たちはパーセンテージを考えているような生き方をしないように。いつも、100%的なものである。質は絶対に100%である。集会に臨むときも、100%の心です。

そうするならば、この寡婦のごとく、あるゆる持ち物を、その生活費全部を、生活そのもの、生命そのものを与えていく。生命そのものを投げ出している人は、完全に神有となっているんですから、神さまに投げ出している。神の中に投げるんですから。他に、横つちよに投げるのではない。キリストの中に投げるんですから。キリストの中に投げ入れたらば、これはもう、力と生命が来るに決まっている。我々は自分を省みて、どうのこうのと処置しようとしたって、どうにもならん。

●キリストの中に飛び込む

いつかも引用したとおり、法然が困ってしまった。

「煩惱は身ぼんのうに添える影で、去らしめんとすれども去らず。

我々はみんな、いろいろな煩惱をもっている。煩惱は身に添える影で、去らしめんとすれども去らず。

菩提ぼだいは

澄んだ心の世界は、

水に浮かべる月で、取らんとすれども取ることを得ず。」

という。これが法然がぶつかった壁です。菩提の境地に行こうとしても、どうにも、水の月の影のごとく取るわけにいかん。菩提に達することができない。煩惱の黒い影を取ろうとしても、どうにもならん。そこで最後は、

「南無阿弥陀仏」

になってしまった。

けれども、福音の世界では、その煩惱も心配いらん。大事なことは、煩惱を去らんとすることではなくて、我がうちに影を消すところの光を受けとることである。光を、キリストという光体を受けとるためには、また光体の中に身を投ずることである。どちらでも同じことです。

「われキリストの中にうち。キリストわが中に」

という。「中に」という字が静的な、静かな「中に」という意味と、「中へと」という動的な意味と両方あります。

「われキリストの中に飛び込む。キリストわが中へ飛び込み給う」

と。もちろん、御霊ですよ。そして、そういった状態になる。動から状態の世界に入る。これが祈りなんです。心を整えることはない。あるがままの、行き詰まりのままの、分裂のままの、そのままがいいから絶しろうと。本当は行き詰まって絶しているんだから。壁



にぶつかっているんだ。その壁の突破は、それはキリストの力がする。十字架が開いている。そして、この突破はできる。十字架が開いていくさるから、できるわけです。

そして、私たちの中にキリストの光体、御霊の光が、御霊の力が来るから、その時に本当にこの行動が――そのような投げ込みが信であると同時にそれはもの凄い行であって――そこにいわゆる行も当然発生してくるわけです。それをただ、信、行、一如、ということを観念したって、どうにもならん。これはどこまでも観念ではない。

●無私の神的な姿

私たちの日常の生き方が、身銭をすっかり投げ出して、二枚とも投げだしているところの生き方であるということが大事です。

私は今度、大学へ――内村鑑三の息がかかっているというわけで、天野貞祐先生がD大学へ私を招いたから――行きますけれども、それで私が大学教授とか何とかいって、いい気になっていたら、それは私はダメですよ。私はいつでも、大学にありながら大学にない。そこで学生にぶつかって、火花を散らしてやる。それで悪ければ辞める。どこにいても、私の在り方というものは献身でなければダメです。

そこでいただくお金は、「曠愛新書」にできるだけ注ぎ込みたいと思っている。何でも神さまのために善用したいと、私はごまかしなく思っています。もし、そうでなかったら、私は祝福されない。今度、家が建ったって、そうですよ。これはやはり、福音のために、神さまのために使わなかったら、私は祝福を受けない。

そういうわけで、皆さんが、どのようなものを持っていようが何であろうが、何をしていようが、どうか、それを全部神有として自覚してやってください。そうしたら、本当の力と喜びと展開が始まる。

私はこの寡婦の姿を見て、その中にある無私の神的な姿に、その中にあるキリストの光に、^{かが}屈まなければならない始末です。また、自分がそういう世界に入ると、月影を宿す自由な姿ですから、水の如く自由です。そして本当に澄明であるから、菩提が、月影が、神のキリストの姿が私たちの中に宿る。

月影が宿るとは、キリストの姿が宿るということ。ここが福音の素晴らしいところです。単なる「南無阿弥陀仏」ではない。ここが福音の内容の素晴らしいところで、主イエス・キリストの御霊を受けとる。それはもう神さまがなさるなら、皆さんは、そこでどのような賜物が展開していくことか。聖霊において生きるのになかったなら、私たちに本当の豊かさ、力と、楽な、またお互いに一切を乗り越えて愛して、お互いの中にキリストの火を燃やすようなものが湧いてこない。もうはつきりしてます。どうか、皆さんは、決してくすぶったクリスチャンであってはならない。

花は陽の光を受けて咲いているが、しかし、私たちの身体から発するところの光を受け



て、万象が太陽の光よりも素晴らしい生命を生命していく。相手の人の心の中に本当の花を咲かせる。こういうことになって参ります。これは恩寵の力ですから。ありがたくてしょうがない。そういった質においては、

「これでいい」

なんていうところは一つもないですから。どしどし、大胆率直に勇敢に進んでいただきたい。レプタ二枚の寡婦の姿において、キリストが

「これだ」

と言つてご覧になった。イエスが見られるものは、みなその通りです。ザアカイのごとき、桑の樹によじのぼる姿もそうですけれども。この福音の世界は、全存在をもつて体当たりする世界です。とやかくと考えたり、辻褄をあわせているような、そんな世界ではない。

始めのうちは、人は躓くかも知れませんが。けれども、

「やっぱり、それは本ものである」

と感ずる。これはもうはつきりしている。この驚くべきキリストという躓きの石が、実は全世界にかくも大きく広がっていく福音である、力である。幸いなるこの福音の力である。もし、キリストが水を割って、少しみんなに分かるようなことを言っておられたら、これだけの力はない。

「根源の世界は絶対に、そういったごまかしのきかない世界であるということをはつきりと受けとって行かれるように」

と言わざるを得ないわけです。

